

# 事業報告書

1 支援団体名	特定非営利活動法人 南畑ダム貯水する会
2 事業名称	よい水循環、総合治水、よい川の社会啓発事業
3 実施日時	12月4日(土) 13時～17時30分
4 実施場所	九州大学西新プラザ 福岡市早良区西新2丁目16番 (Tel: 092-831-8104)
5 事業目的、内容及びその効果	<p>(事業実施状況・内容)*できるだけ詳細に 第7回シンポジウム「雨から川へ、水のつどい」 — 水循環系の再生により期待される、流域景観のデザイン —</p> <p>雨がふり、川へと流れる…「水のつながり(人のつながり、世代のつながり)」を再生するという視点で、福岡の治水・環境など、さまざまなつながりと、これからの考えてみましょう。</p> <p>司会：中原 明子(福岡県建築士会) [つどう要旨] 流域の直接流出を抑える治水の方法が注目されています。地表がコンクリートで覆われた都市河川の流域では、過激な都市型水害への対策として、この方法への関心が高まっています。流出抑制の効果は治水に止まりません。これで負担が軽くなる河道では、自然の働きと景観がよくなり、親水活動がふえると期待されます。</p> <p>流域に降った雨を貯留・浸透して直接流出を抑制するには、流域で暮らす多くの人々の主体的な取り組みが不可欠です。これが河川の環境・景観・親水の働きの改善に役立つと自覚されるとき、いっそうやりがいのあるものになるでしょう。</p> <p>このように、怖いこと・困ったこともあるけれど恵み多き自然でもある川と主体的で自覚的に居り合うことは、水空間のデザインを導くだけでなく、自然と関わる生活を自らデザインするという、人間の本質に深く関わる意義があります。さらにこれは自然と人間の望ましい関係を導くことにも止まりません。流出抑制に取り組むことで、人と人とを結ぶ水の働きが明瞭に認識されるとき、流域内での積極的な人的交流の必要が自覚され、実施されることでしょう。その意味でこの取り組みは、コミュニティデザインの役割も担うことになると考えられます。</p> <p>自然と人間そして人と人との関係を、主体的・自覚的に形成することは、短期間で達成すべきことではありません。人の関わる自然と地域社会の成熟には、固有の時間の蓄積が不可欠だからです。しかし目まぐるしい現代都市の生活は、この点に十分な配慮をしてこなかったようです。流域に相応しい風土の形成と、その担い手の一員としての自覚が、さらなる流域の安定的変化に連なれば意義深く、さまざまな関係の持続可能性が高まると考えられます。流出抑制を通して流域の空間と生活をデザインする話し合いをもちたいと思う所以です。</p> <p>1. 基調講演：“流出抑制”はデザインか？(60分) 山下 三平(九州産業大学 教授)</p> <p>《内容》【風景とデザイン】 ・デザインの定義 ・芸術的な意匠の表現 ・総合的な計画の表現 ・風景とデザイン ・パターン認識と、解釈の風景——その必要と陥穽 ・星座・虫・雪道・観相・風景 【解釈の風景と流域のデザイン】 ・計画の区域と流域 ・都市計画区域と景観計画区域 ・景観計画区域と流域 ・解釈の風景の道具立て ・水循環の象徴的役割 【流出抑制とデザイン】 ・流出抑制と風景 ・デザインの基盤としての関係性の回復 ・デザインの基盤＝関係・関係の回復がデザインを導くという考え 【流域景観デザインの方向】 ・デザインを支える技術・大・中・小技術システム ・中と小の技術の重要性・流出抑制が期待される土地利用との関係</p> <p>2. 特別報告①：雨から始める家づくり・まちづくり(30分) 神谷 博(株設計計画水系デザイン研究室、建築学会)</p> <p>3. 特別報告②：水からはじまる庭デザイン～庭先からはじまる街づくり(30分) 山中 志保(チャープガーデン、JAG(ジャパングーデンデザイナーズ協会)理事)</p> <p>4. ディスカッション(90分) コーディネーター：島谷 幸宏(九州大学大学院教授)</p> <p>(事業実施効果) シンポジウム「雨から川へ、水のつどい」により、よい水循環と、総合治水などについて、専門家の持つ知識や見識を、地域のさまざまな立場の人々が集まって理解し、共有することができた。このシンポジウムの開催などを通じて生まれた市民、大学、行政、市民団体のネットワークから、全国でも先進的な流域治水の試みが樋井川をモデルに始まっている。流域治水の個別の対策だけに目が向けられがちだが、私たちが本当に目指す「暖かみがあり、助け合うことのできる社会」の実践だということが、デザインという言葉を通して理解を共有することができた。</p>
6 参加内訳	総人数 120名
	(1) 主催者参加 20名
	(2) 日本人参加((1)を除く) 100名
	(3) 外国人参加((1)を除く) 名
7 今後の方針	毎年、河川管理者と、雨水をためる市民団体との高齢のシンポジウムとなり、行政と市民をつなぐ、さらに多くの人水循環にかかわることのできる場として、このシンポジウムは定着した。ここで生まれたネットワークが、さらに広いつながりとなるために来年からも事業を継続させていきたい。

状況写真（基調講演；山下教授）



状況写真（特別報告；神谷氏）



状況写真（特別報告；山中氏）



状況写真（ディスカッション）



状況写真（特別報告；神谷氏）



状況写真（特別報告；山中氏）

